

徳富蘇峰はラフカディオ・ハーンをどうみていたか？

西にし川かわ盛もり雄お

(一) はじめに

昭和十年（一九三五）九月二四日徳富蘇峰（一八六三―一九五七）が富山の「ヘルン文庫」を訪ねている。この時のガラス乾板が富山で見つかった。芳名録には蘇峰直筆の署名もある。当時出来たばかりの富山の蘇峰会が招いたとのこと。また同年十月十日の東京日日新聞に蘇峰本人の「ヘルン文庫」訪問の記事が載っている。そしてこれらのことがNHK富山放送局で報じられた。筆者は「ヘルン文庫」の栗林裕子主幹の好意でこのことを教えられたとき、早速熊本の「徳富記念館」を訪ねてみた。はからずも当館館長の尽力で蘇峰がハーンについて昭和六年八月と十二月に書いた文章を確認することができた。ハーンも蘇峰も熊本に所縁が深い人物であり、時丁度熊本の新聞博物館で蘇峰生誕一五〇年記念展示会が開かれていたさ中であつた。

「徳富記念館」で目にした書物は昭和七年十二月二十日、民

友社発行の『典籍清話』という蘇峰著の書物である。その中には二つのエッセーがあつた。一つ目は小泉一雄の「父八雲を憶ふ」について昭和六年八月十八日付けで書かれた蘇峰の評である。この評には「一 小泉八雲の日本」と「二 好く描いた」というサブタイトルのエッセーが二つ入っている。二つ目は昭和六年十二月廿一日付けの評「小泉八雲の『怪談』」であつた。

(二) 「父八雲を憶ふ」

○ 「一 小泉八雲の日本」

まずこのエッセーの冒頭の段落で蘇峰はハーンを「寧ろ愛好す可き且つ尊敬す可き彼であつた」と好意的に述べる。次いで蘇峰がハーンの名を知り且つ世界的作家であることを確認した経緯について記す。まず「予がハーンの名を知つたのは、明治二七年、井上毅君から、熊本第五高等学校教師某の、日清戦争に関する一文を受け取つた時であつた。その某が即ち

小泉八雲君であつた。」と述べ、次いで明治三十年、米國から帰朝の船の甲板上で米國夫人がハーンの『心』を読んでいるのを見て蘇峰は「小泉八雲君が、如何に世界的に有名であるかを、漸く知るを得た。」と述懐するのである。明治二十七年の日清戦争の頃はすでに晩年であつた井上毅は元熊本藩士で蘇峰と同郷の人物であつたことは記憶に留めておいていい。

蘇峰は異なつた考えや価値観があるとき、一を取つて他を裁くというより、両者を併せ呑むという性向があつたようだ。蘇峰のハーンを見る目の柔軟さと奥行き深さの所以であるうか。蘇峰は言う。「君が好んで踏破しつゝ、ある境地は、同じ日本を其の繩張りとしつゝ、も、我等の歩む可き境地とは、自から方角が殊なりつゝ、ある」とハーンとの見解の微妙な相違を指摘する。そして宣教師が好きでなかつたハーンに対して「記者も決して宣教師の無条件的讚美者ではなかつた。されど宣教師攻撃者の無条件的味方にもなれなかつた。」と言つてハーンの「偏癖」「臆断」を否す。ここで「記者」とは蘇峰自身のことであるが、両者相俟つて有能なジャーナリストであつたことが思い出される。

ここで蘇峰はかつてL・L・ジェーンズの下、熊本洋学校に入り、英語や泰西の学問やキリスト教のことを学んでいたことが思い出される。洋学校閉校後蘇峰は一度は上京するものの同志社英学校に入って生涯の師と仰ぐ新島襄と出逢い、この新島から洗礼さえ受けている。(後にこれを返上することになるが。) 身近には宣教師たちがおり、熊本バンドと呼ばれ

た同郷の連中たちがすぐそばにいた。蘇峰はキリスト教や宣教師のことは彼なりによく知つていたのである。

さらに、蘇峰はこのエッセーで「粉々たる日本の批評者中に於て、別様の光りを發揮したるは、ハーン其人であつた」といつてハーンを際立たせ、「ハーンが日本を発見したと云はんよりも、日本がハーンを発見したと云ふ可きだ」と指摘する。

この擬人法的な発想にはハーンを対象化して見ている蘇峰独自の眼差しがある。日本は、西洋人で日本にあつて日本を理解しようとし、さらに西洋の言語(英語)でこの日本のことを西洋に向けて「伝導」してくる逸材をハーンの中に見つけ出した。その結果として日本が世界に向かつて発信された。これが蘇峰の言う「日本がハーンを発見した」という意味ではないだろうか。

さらに蘇峰は「小泉八雲の日本が眞成の日本乎、將た只だ是れ小泉八雲の日本乎。」という問いかけを行い、「何れにしても、御礼は双方から云はねばなるまい。」とまとめている。

〈ハーンから日本への御礼〉、〈日本からハーンへの御礼〉と互の「折り合い」のスタンスが織り込まれている。ここに蘇峰のハーンに対する高い信頼感を読み解くことができる。

蘇峰は明治、大正、昭和と三つの時代、したがって日本の近代化の時間軸をそのまま思想家、ジャーナリストとして生きた人物であつた。西南戦争後藩閥政治に対する自由民権運動の中、明治十五年十九歳で「大江義塾」を開校、明治二三

年にこれを閉じるも『将来之日本』を田口卯吉の経済雑誌社より発刊して上京、明治二四年には民友社を起こして雑誌『国民の友』を発刊、明治二七年にはこれを『国民新聞』に統合して政治、社会、文芸、宗教の改良を旨に、陸羯南くわかつなんによる雑誌『日本』に対峙して新しい当時の論陣を張ったのであった。

○「一好く描いた」

これは長男一雄が描いた『父八雲を憶ふ』の出来栄えについてのエッセーであるが、ここでは蘇峰のハーン理解の程がよく窺える。

第一に、「八雲其人が、一種の変人、奇物であったことを聞いている。この書を読んでもそれは打ち消されない」として蘇峰の心にもハーンはやはり「変人・奇物」としての存在であったことを窺わせる。

第二に蘇峰は「其の半生を放浪生活に送りたるにも拘らず、如何に無垢の人間であり、清浄の人間であったかを知り、而して如何に気随でもあり、我儘でもありつゝ、彼れ流儀の几帳面なる良好の父たり、夫たり、師たり、友たる人であったことを知るを得たるを、中心より欣ばざるを得ない」と述べている。簡潔なハーンの特徴描写である。そして彼の才能を評して「砂を化して金となし、石を化して珠となす、一種の天才の持主であった」と描くとき、蘇峰は、日本はハーンその天才を発揮する対象物であったのだと言う。ハーンは身体的に〈独眼〉かつ〈強度の近視〉であったことも、精神的に〈邪推も深く〉〈神経的で〉あったことも総じて「決して彼の

徳を瀆けがす程ではなかった」と述べるとき、蘇峰はハーンの天才ぶりを何者にも換え難いものとして評価していたのである。

蘇峰はハーンハーンの性格が「気六ヶ敷かつたことは、彼の女性的の性格からすれば当然の事にして、深く咎む可きではあるまい」と言う。そして「一般文士の常軌に準じて、最も立派なる紳士と云はねばならぬ。」と重ねて言うとき、〈文士〉としての視点で蘇峰はその才能とともに尊敬心をもってハーンを高く評価していたのである。

最後に蘇峰は「一雄君は文豪の長子だけありて、能く其父を描いた」と述べ、その七分までは自己の過去を懐つたものでハーンに関するものは「十分の三」を出ない、と指摘しつつも「されど其の三分の所に子でなくては描き難き其父の傳神像が活躍してゐる」と結んでいる。蘇峰がサブタイトルを「好く描いた」とした所以である。

(三) 「小泉八雲の『怪談』」

このエッセーは短く、『怪談』の内容に関する言説ではないにしても蘇峰の『怪談』に対する製本と装丁美への関心の程が窺えて興味深い。ニューヨークで毎月一冊ずつ一千五百部限定出版される書物の中に『怪談』が選ばれ新装なって日本の審美書院より出たことを喜ぶエッセーである。藤田安正氏の挿絵の面白さを強調して「概して上品にして、他の快感を攪乱するが如き類を見出さない。」としてこの書を大いに褒めているのである。

(熊本大学客員／名誉教授)